

保育計画成果報告書

法人名等	株式会社みいろ
施設名	保育の家みいろ (ホイクノオウチミイロ)
報告者 (役職)	水野 智数 (園長)
住所・連絡先	香川県高松市香川町浅野 668-5
	☎ 087-880-3274
	E-mail miiro-hoiku@outlook.jp

○タイトル (保育計画)

繋がりの森

○主な助成備品

高麗芝・シラカシ・コナラ (どんぐりの木)

1. 保育計画策定の目的

(課題) 「危ない」「汚い」「触らないよ」「ダメ」家事と仕事の両立、日々の育児でとても大忙しの保護者からよく耳にする言葉である。この言葉は家庭だけとは限らず、子どもを取り巻く環境においてもそうである。保護者の日々の頑張りを労い保護者支援に力を注ぐも、否定的な言葉を多く受ける子ども達は、目新しい環境に遭遇しても子ども自ら関わろうとする様子もなく、どこか消極的で不安な様子である。馴染みのある遊具があると遊び始めるが、しばらく遊ぶと飽きてしまう。自然環境では遊びのイメージがわかず遊びが広がらない。また否定的な言葉を多く受け自己を肯定する気持ちが育まれていない事から、遊具など身の回りの物を乱暴に扱う、子ども同士のトラブルが絶えないなどが日々の保育を行いながら当園の課題となっていた。

(原因) これらは家庭環境だけによるものではなく、私たち保育者ももちろんであり、子どもを取り巻く大人の環境による影響が大きいと考えた。また保護者の言葉から、家庭において身近にある公園や遊具のある施設には足を運びやすいものの、自然の中で活動ができる場には足を運びにくいように感じた。そこで子どもが自然の豊かな環境の中で五感を精一杯に研ぎ澄ませ活動できる環境を用意する事で、子どもが主体的にのびのびと活動できる事は基より、大人もその環境の中で子どもの感性に気づき、気持ち穏やかにゆったりと関われる事で「ダメ」「危ない」「汚い」などの否定的な言葉も減り、子どもが自己を肯定する気持ちが育まれてゆくのではないかと考えた。

(目的) 園庭に高麗芝を貼りどんぐりの木を植え、季節の変化に応じて様々な自然体験が行えるように計画を立てた。

2. 具体的な実施内容



(1) 園庭に高麗芝を貼り築山を作る

・4月初め、緑広がる芝生の園庭を見て思わず駆け出す子ども達。築山を見つけて真っ先に向かうが両足だけではうまく登れず、何度も繰り返していくうちに両手両足を使いながら一生懸命に登る。登るには履いている靴もわずらわしく感じ、裸足で駆けあがる子もいる。繰り返しの途中で転んでも芝生がクッションとなって痛みが少ない事に気づき、今度は築山の頂上から滑り降りてみる。また用意してあったスライダーを見つけ保育者と一緒に築山を滑り降りる。斜面から転げ落ちても思わず笑ってしまうほどに楽しい遊び場となった。



・6月の保育参観では、園児の保護者と一緒に園庭を駆け回る子ども達。子ども同士、保育者との関わりだけでなく様々な行事を通じて、子ども自らが身近な大人や地域社会との交流を深めていく。

(2) シラカシ（緑葉樹）コナラ（落葉樹）の木を植える



・4月、コナラの木は次第に葉を茂らせる。その変化を不思議そうに間近で眺める姿があった。また木の付近にある丸太に集まり上り下りをしたり、2歳児は忍者になりきった様子で全身を使って大きくジャンプしたりして友だちとごっこ遊びを楽しむ姿があった。穏やかな気候の日には、保育者がギターを持ち出し歌遊びが始まる。何か面白い事が始まりそうに行っていた遊びを中断し集まってくる子ども達もいれば、行っている遊びを中断する事なく夢中で楽しんでいる子ども達もいる。夢中になる遊びは、子ども達それぞれである。



カエル見つけた

・カエルを発見し興味津々になる1歳児。触ってみるのは少し怖いから、そっと眺めているとカエルがピョンと跳ねた。それが面白くて追いかける。追いかけるとまたピョンと跳ねる。繰り返し楽しんでいると自分もカエルのように跳ねて追いかけていた。カエルになったつもりでピョンピョンとカエルと一緒に追いかけて楽しんでいた。2歳児のお友だちはカエルを捕まえるのもお手の物である。その様子を感じた様子で眺める1歳児。また2歳児が丸太から大きくカエルジャンプ。身近な生き物に触れながら子ども達の遊びにも変化が見え始めた。



・7月～9月、園庭にはカエルの他にもバッタやトンボなど様々な生き物が顔を見せるようになった。子どもの興味に合わせて虫網や虫かごを用意しておく、それらの道具を使って子ども達も保育者も虫を捕まえようと夢中になって遊んだ。はじめはただ虫アミを持って追いかけて楽しんでいたが、うまく捕まえる事ができない経験を重ねていくうちに捕まえ方の感覚を身につけていった。慣れてくると虫アミを使わず、生き物にそっと近づき両手で包み込むように捕まえる子もいた。

(3) 芝生広場での様々な遊び体験

・夏には水を自由に使えるようにホースをフェンスに結びつけ水を流した。用意してあったタライに水が溜まると、水につかってお風呂みたい。タライは丁度よいサイズで居心地よく、友だちと一緒に存分に水遊びを楽しむ2歳児。子ども達の濡れた靴を保育者が洗濯ロープに引っ掛けていると、1歳児のお友だちの洗濯ごっこが始まった。午前おやつの際に使用したお手拭きタオルを洗っては干して、何だか「せんたくかあちゃん」の絵本みたいに楽しんでいる様子である。



洗濯ごっこ

落ち葉 集め

・11月、畑で収穫したサツマイモを使って焼き芋を作る。子ども達の役割は園庭のあちこちにある落ち葉を集める事。落ち葉が多く集まっているのは、コナラの付近と知っている1歳児さんは一目散に駆け出す。数枚の葉を集めては保育者に渡し、集めては渡しを繰り返して夢中で遊んでいた。2歳児と協同して落ち葉を集め始めた1歳児は、コナラの枝を揺らし落ち葉をバケツに集める工夫を行っていた。サツマイモが焼きあがると「いる」「いる」と言って子ども達と一緒に秋の味覚を楽しんだ。午後のおやつで食べたサツマイモの味とまた違って美味しかった様子で、もっと欲しいと焼き上がりを心待ちにしている子もいた。



・見渡す限り緑だった芝生も冬支度が始まる頃には、褐色へと変化をしていった。4月には届かなかった高い木の枝や葉にも、背伸びをすると届くようになっていた2歳児のお友だち。大きくなったという喜びを感じる瞬間でもある。

(4) 地域子育て事業を通じたイベント



・10月下旬は、園庭の芝生広場で地域の子育て世代を巻き込んだ歌遊びフェスタ（みいロック 2020）を行った。県内アーティストによる演奏や歌遊びに手形アート、地域のお年寄りによる絵本の読み聞かせなど、おおよそ100人の親子やアーティストが様々な芸術活動を通して交流し楽しんだ。澄み渡る空の下で、子ども達は芸術に親しみ大人は忙しい日々から距離を置き、のびやかに過ごす時間となった。

3. その成果と評価

・四季を通じて行った広い芝生広場での活動は、「ダメ」「危ない」「汚い」などと子ども達の活動に制限される場面が少なく、走る、登る、跳ぶ、押す、滑るなどの粗大運動遊びを十分に行う事ができた。もちろん転ぶ、落ちるなどと身の危険を感じるような場面もあったが、次こそはと慎重になって試してみたり、怖いからやめておこうなどと引き下がってみたり、保育者に助けを求めたりなど、子ども自身も今の身体の限度を知り、その力量の範囲内で精一杯に活動を楽しむ姿があった。活動を積み重ねていくなかで、今まででき

なかった事や怖かった事が、次第にできるようになり喜びとなって、次なる活動の意欲に結びつく場面も多くみられた。

・大きな遊具がなくても、自然環境と子どもの発達に合わせた適度な遊具や道具を用意してある事で、子ども達はそれらの環境を最大限に生かして、イメージを膨らませ遊ぶ姿があった。保育者も子ども達と遊びを楽しむ中で、一人ひとりの成長や個性に気づき「すごいね」「いいのができたね」「優しいね」「ありがとう」など認める言葉も増えていった。

2歳児のお友だちの中で、年下児に視線を合わせて話しかけたり、靴が脱げているのを手助けしてあげたりとささいな気配りを行うように関わる姿も見られた。繋がり森というテーマで行った保育計画は、身近な自然との繋がり、生き物との繋がり、子ども同士の繋がり、保育者との繋がり、地域社会への繋がりとなり、経験を通じて深まっていく様子が見られた。



4. 今後の課題と展望

落葉樹であるコナラは季節の流れとともに葉をつけ変化が見られたが、緑葉樹のシラカシは大きく成長する様子もなくあまり変化が見られなかったため、子ども達の遊びに活用される場面はなかった。変化のあったコナラもドングリが実をつける事はなかったため、実をつける頃には、ますます子ども達の遊びに活用されそうである。春から秋へと季節の変化により草花が生え、それにより様々な生き物も集まるなどして、子ども達の遊びも豊かになったが、寒い冬は草木も枯れ身近な生き物もいないので、自然をどのように活用し子ども達の遊びがより豊かに行う事ができるかが今後の課題である。

今後の展望としては様々な用具を活用したり、植樹したり、季節の変化が感じられるような「しかけ」を準備しておくなど環境設定に工夫が必要となってくる。

以上